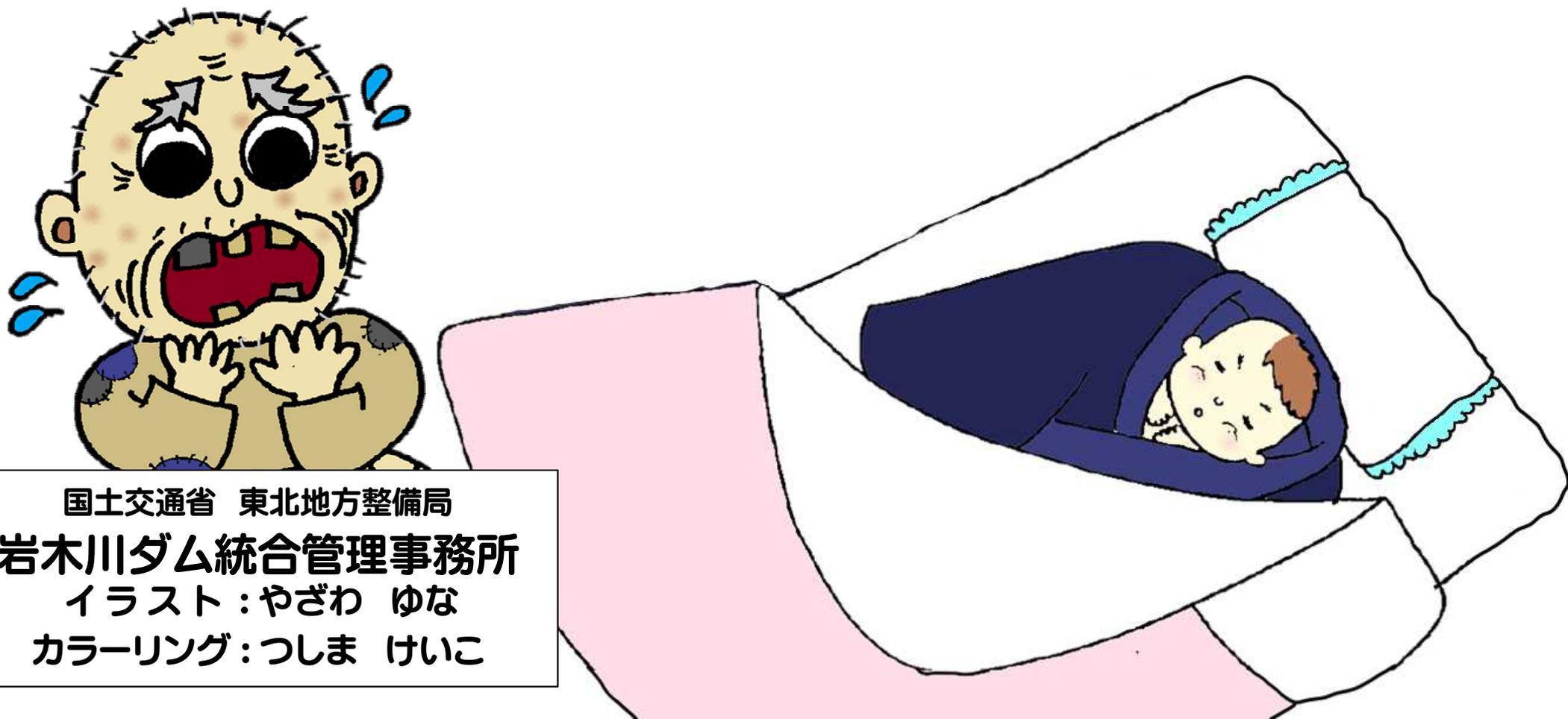


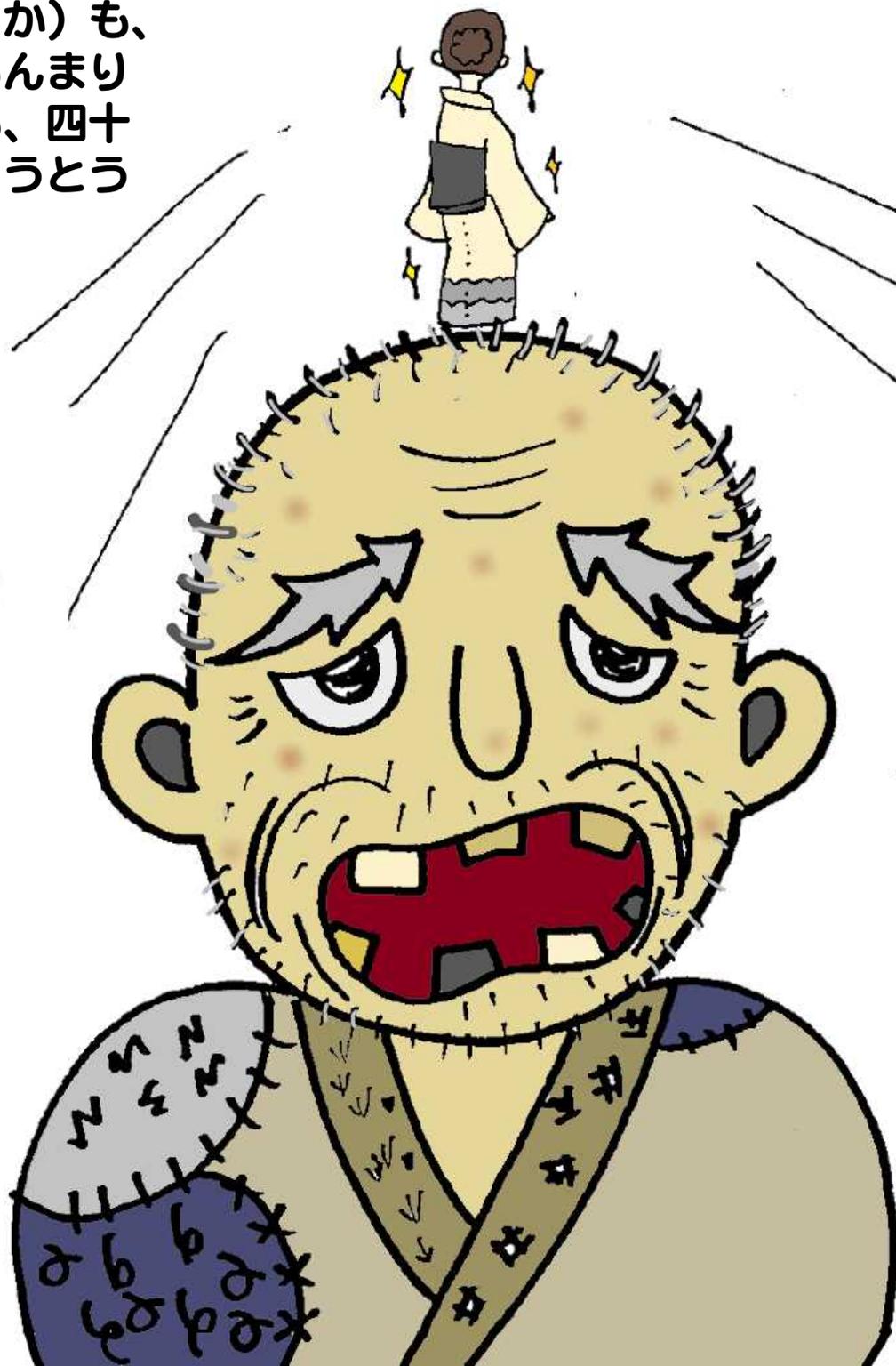
つがるの昔っこ (昔話) 15

# 赤ん坊になった じさま (津軽弁)



国土交通省 東北地方整備局  
岩木川ダム統合管理事務所  
イラスト：やざわ ゆな  
カラーリング：つしま けいこ

昔むがし、何（なん）も彼（か）も、  
貧乏だ、ジサマ居であたど。あんまり  
貧乏だどこで、三十になっても、四十  
になっても、嫁も貰わねで、とうとう  
六十になってまたど。





『我（わ）、どうして、こったらに貧乏に生まれついたんだべ。何（なん）も倅せだ事も無（ね）で、歳とってまた。このまま死ぬんだば馬鹿臭（ばくせ）くてまいね。あーあ、もう一度若（わけ）ぐなって、倅せだ思いしてみてもんだ』ど思（も）て、観音様さ拝みに行たど。

『観音様、観音様。死ぬ前に、1回でもいいはんで、倅せだ思いこ、さへでけし』と、毎日毎日通（かよ）って、一生懸命拝んだど。

ある日の事、ジサマ、又、観音様さお参りに行ったきや、そのお寺の前さ、立派だなりをした商人のアンサマ居で、一生懸命拜んであたど。ジサマ、『アンサマ、アンサマ、お前（め）、何ば頼んでらのし？』て聞いたど。アンサマ、『私（わ）、町の呉服屋だけども、商いが繁盛して、店も大きくなたばて、後継いでける子供が居ねのし。何とか子供を授かって下さいって、お祈りしてらんじえすじや』



『んだが、んだが、我（わ）も願掛けでら事あって、毎日、ここさ来て拜んでらんだ。それだば、これがら、お前（め）の分も一緒に拜んでやるべ』て言（し）たきや、アンサマ喜んで、『ジサマ、ジサマ、今度（こんだ）町さ来たら、必ず私の家に寄って下さいへ』て、待だせでら馬さ乗って戻（もど）って行ったど。



三七、二十一日の満願の日、ジサマ、今まで以上に、熱心に拝んでいただきや、奥の方から、何だがおゴレエ声して来たずおんな。

そしたきや、その声の主（ぬし）ア『こごさ、有難（ありがんで）い護符（ごふ）、5枚あるはんで、これば、お前（め）さ授（さず）げる。この護符を一枚飲めば、二十年ずず若（わけ）くなるはんで、若くなったら、一生懸命働げ、そうせば金持ちになるであろう』て言（し）たど。



見だきや、ジサマの前さ、護符5枚あったど。(護符ってすの?、お守りのお札のごとだ)  
ジサマ、もう、早(はえ)ぐ若ぐなりたくて、なりたくて、1枚の護符ばベロツと飲み込んだど。  
したきや、不思議、ふしぎ、なずぎの皺コ、スーッと消えて、白いパヤパヤず髪のも見る見る  
黒くなって、ふさふさどなったんだど。

ジサマ、。どってん、喜んで、もっと若くなりてど思（も）って、ウツて、もう1枚飲み込んだど。したきやあ、体さ力、もりもりど出はて来て、あちこち抜けで、ポロラッポロラど、欠けた櫛だけんたになつてら齒コもソロバンの玉コだけんたに、ズラーツと揃た、二十歳ぐらいの若者（わけもの）になつたんだど。



さあ、ジサマ、嬉しくて、嬉しくて、嬉しくて、とんで村さ戻て来て、片っ端から村の人さ声かけだど。『おーい、太兵衛。おーい、権助』呼ばれでみでも、誰（だん）もおがしい顔をして、返事もさねど。ジサマ、片っ端から村の人をつかまえて話しかけたども、皆、気味悪がって逃げでいぐど。

そこでジサマ、『そんだ、町の呉服屋のアンサマの所（どご）さ行ってみるべ』って、町さ行たど。アンサマの呉服屋、蔵、七つも八つもある大っきい店であたど。この店で働かせでもらうべがなど思（も）って、入っていったども、あんまり着てるもの汚ねくてあたどごで、手代も番頭も誰（だん）も相手にしてけねど。

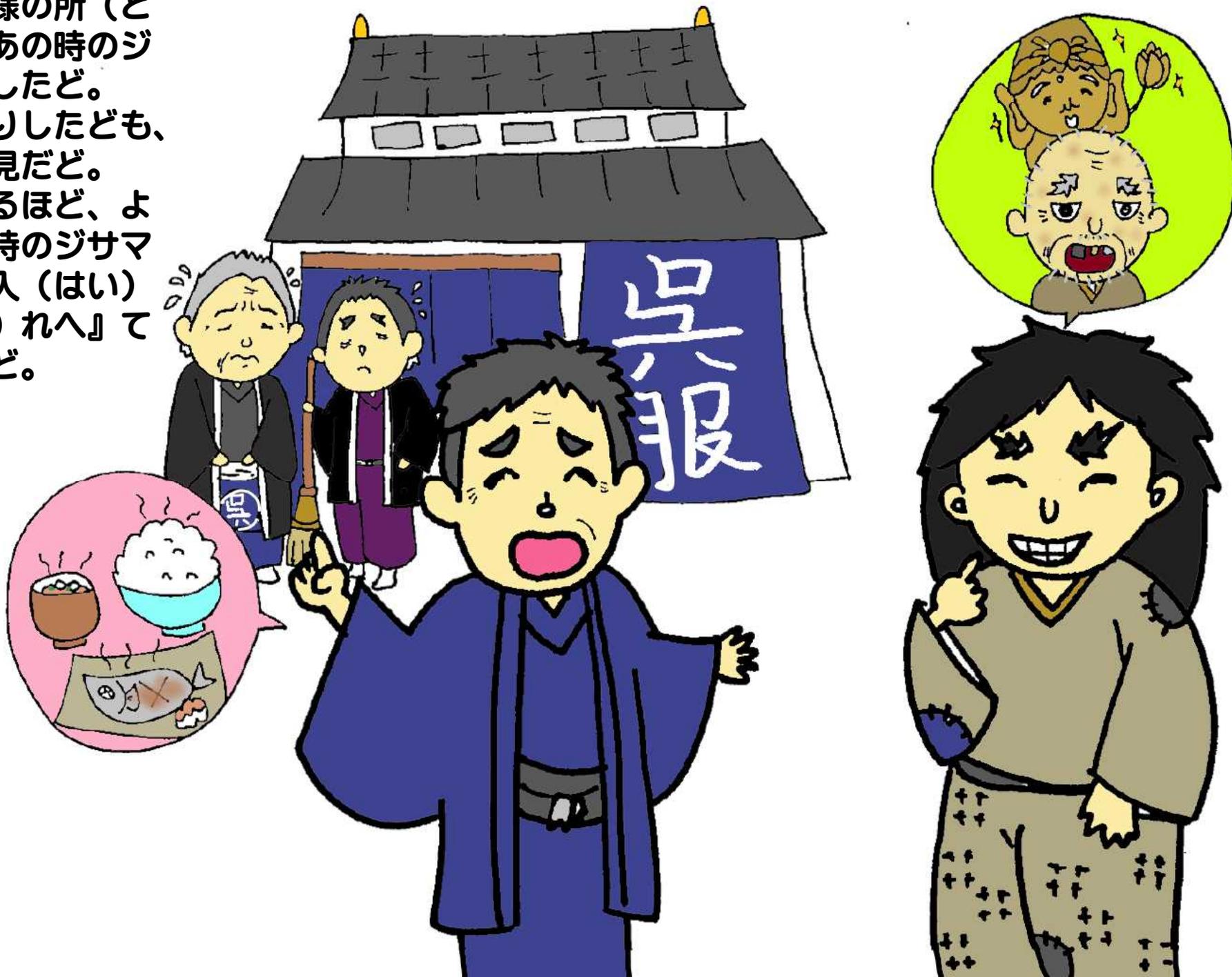


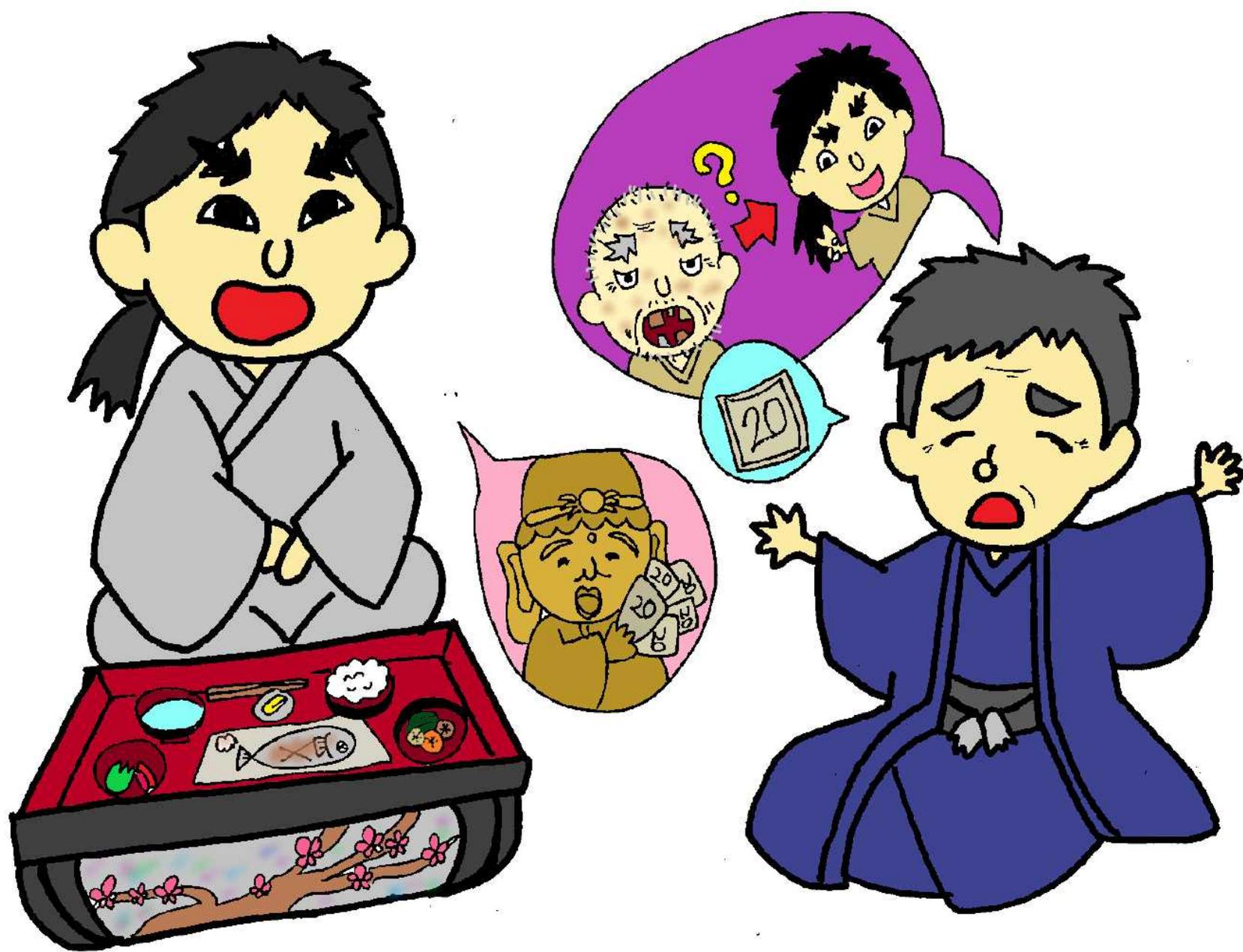
あんでもね、こんでもね、て騒いでらどごさ丁度（ちょんど）、あの時のアンサマ出てきたど。

『あれー、アンサマでねが。我（わ）、観音様の所（どご）で合った、あの時のジサマでさね』てしたど。

アンサマびっくりしたども、よーぐよぐ見で見だど。

『あれあれ、なるほど、よく見れば、あの時のジサマだ。ささ、まず入（はい）れへ、入（はい）れへ』て中さ入（へ）だど。

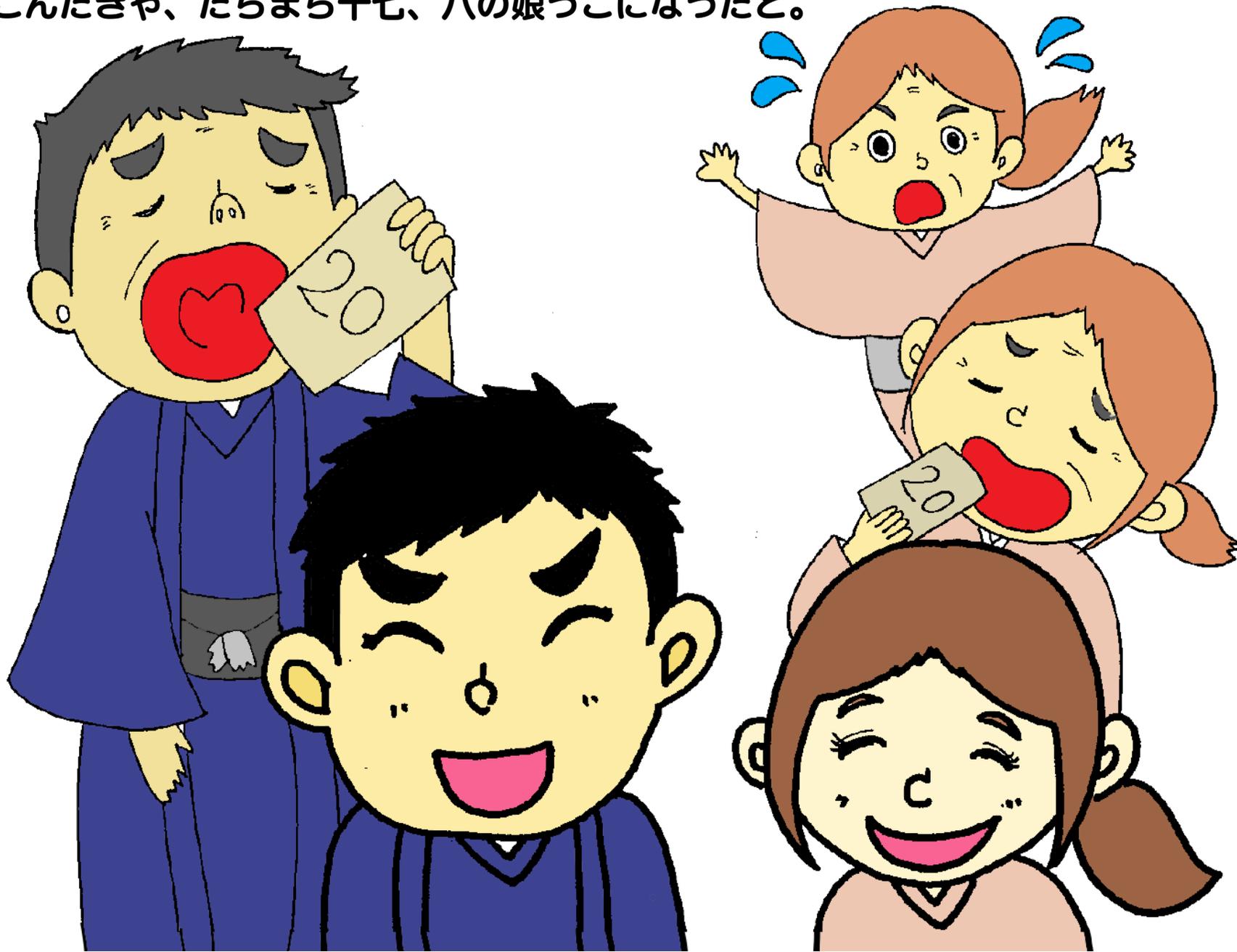




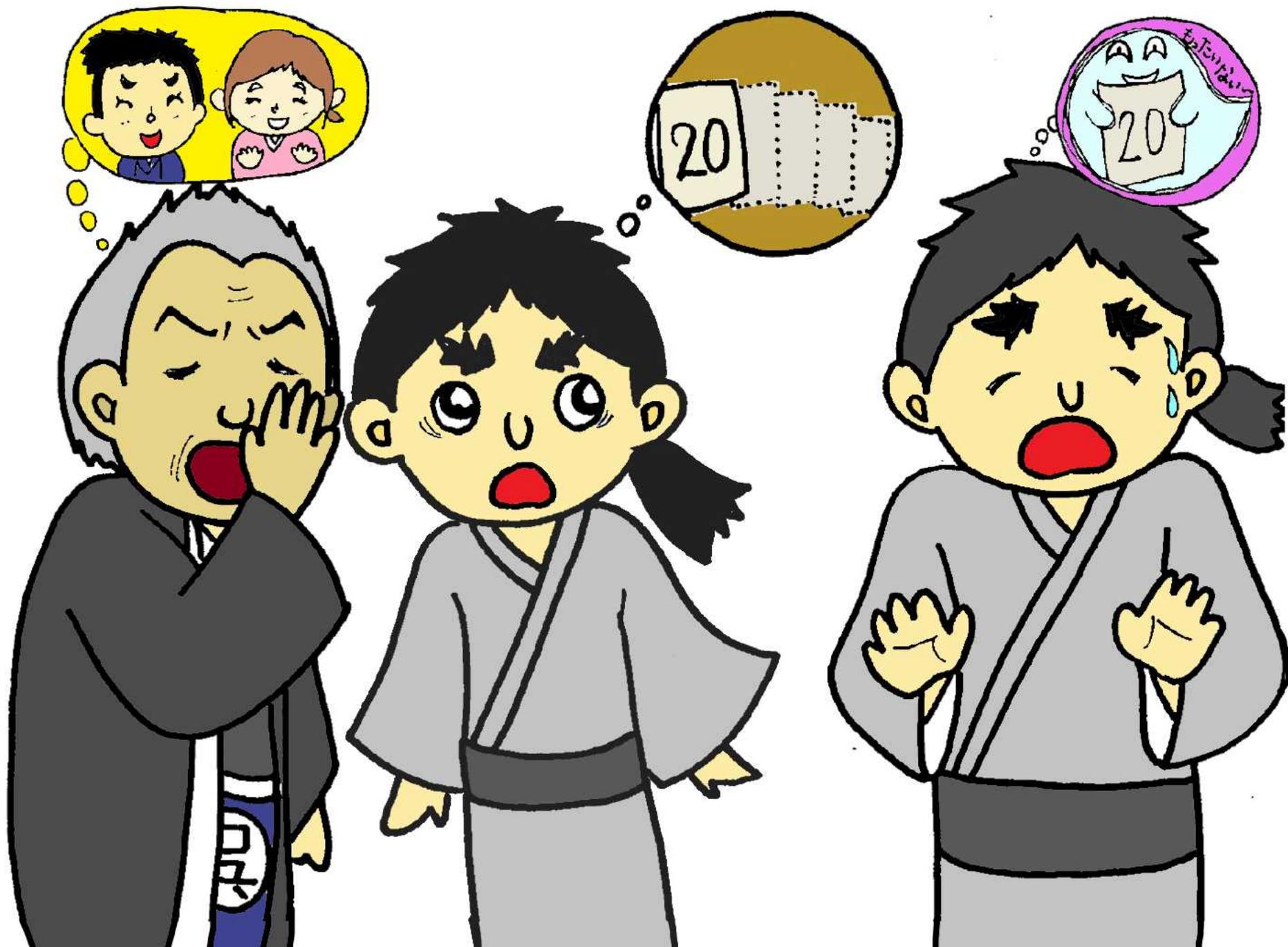
アンサマ、ジサマば湯こさ入（へ）で、さっぱどした着物こさ着替えさへで、奥でご馳走したど。そして、『ジサマ、ジサマ、どうして、そう若（わけ）ぐなれした？』て聞いたど。

ジサマ、観音様の護符の事、話して知（しか）へだど。アンサマ、目（まなぐ）丸ぐして話コ聞いでらども、こんだ、『何とか、私（わ）さも、その護符一枚、分けでけへ』て頼んだど。ジサマ、うんご馳走になったし、お礼だと思（も）て、アンサマさ護符ば一枚けだど。

アンサマ、その護符ば飲み込んだきや、直（すん）ぐに二十五、六の若者（わけもの）になりました。それば見だ、アンサマの嫁コ、動転（どってん）して、『ジサマ、ジサマ、おらえのアンサマ、こした若者になってまれば、これだば、私があんまり年上になって、釣り合わねはんで、私（わ）さも一枚けでけへ』って頼んだど。ジサマ、仕方ねぐ、嫁コさも一枚けだど。嫁っこア、護符ば飲みこんだきや、たちまち十七、八の娘っこになったど。



それば見た番頭も『私（わ）さもけでけ、私（わ）さもけでけ』てしたども、護符ア、もう一枚しかねえ。ジサマ、番頭さけるんであば、いだわしぐなって、『明日まで、考えさへでけへ』て断って、その晩はアネサマが用意してけた、ふかふかず布団こさ入って、横になって考えだど。





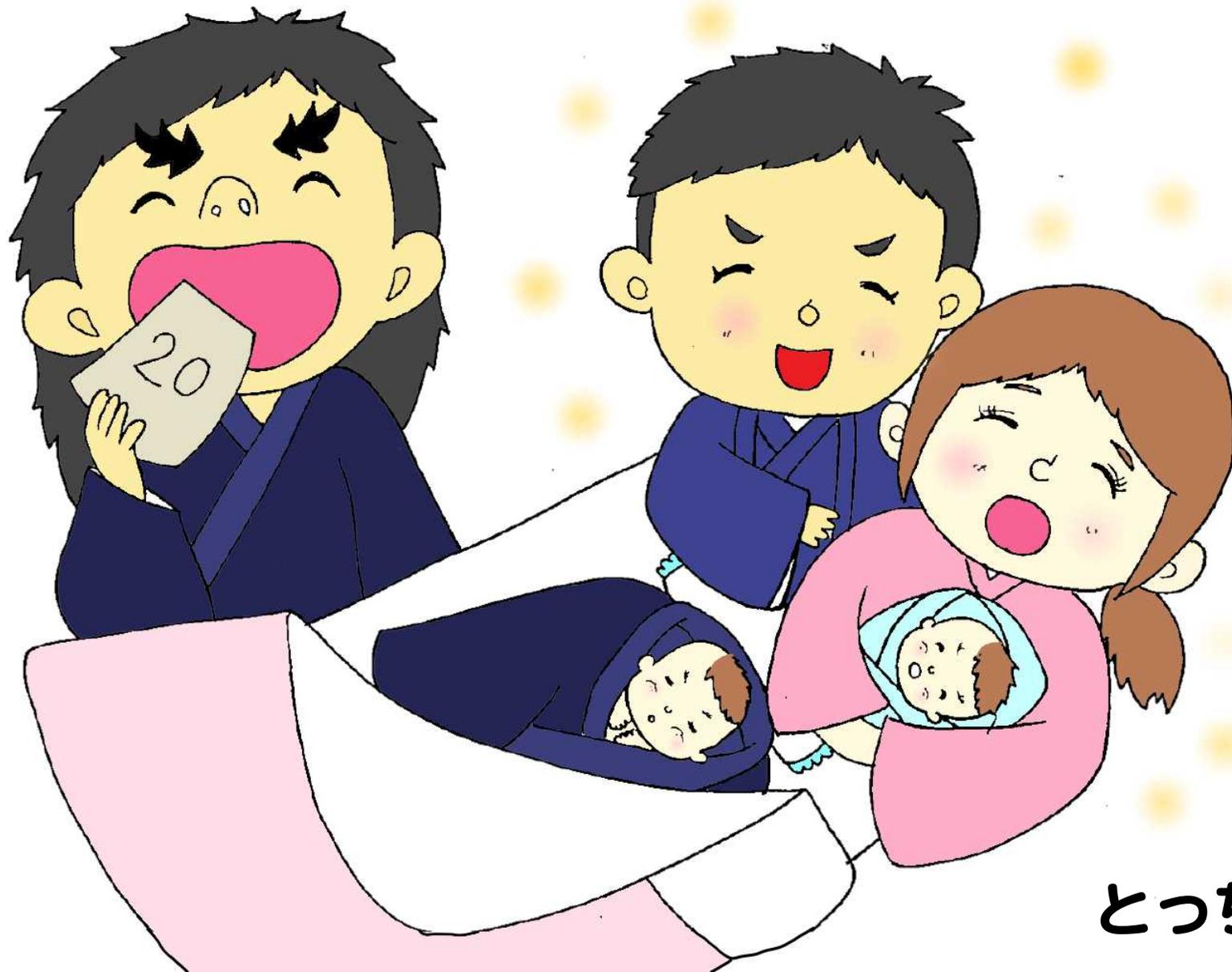
したばって、どう考えでも、残りの一枚、人にやるのはいだわしい。

特に、昼間、アンサマとば訪ねで来た時、我（わ）ごと汚（きた）ねがって、追（ぼ）ってまる気なた番頭さ、けるもんだが馬鹿臭い。

『そうだ、この一枚も、我（わ）飲んでまればいいんだ。へばもうもう誰がらも取られる事ねえ』

ジサマ、最後の一枚の護符ば、ベローっと飲み込んでまたど。

次の朝、なんぼ待っても、ジサマ起きでこねもんだとごで、ジサマの寝でら部屋さ行ってみだきや、ジサマ、どこさも居ねど。ウツて見だきや、寝床（ねどご）の中さ、生まれたばかりだけんた、めごーい赤ん坊眠（ね）てあたど。アンサマどアネサマ、『これア、きっと、観音様の授かりものだびよん』て大喜びして、可愛（めご）がって、可愛（めご）がって赤ん坊とば育でだど。そして、今度（こんだ）赤子のジサマ、倅せに暮らしたんだど。



とっちばれ